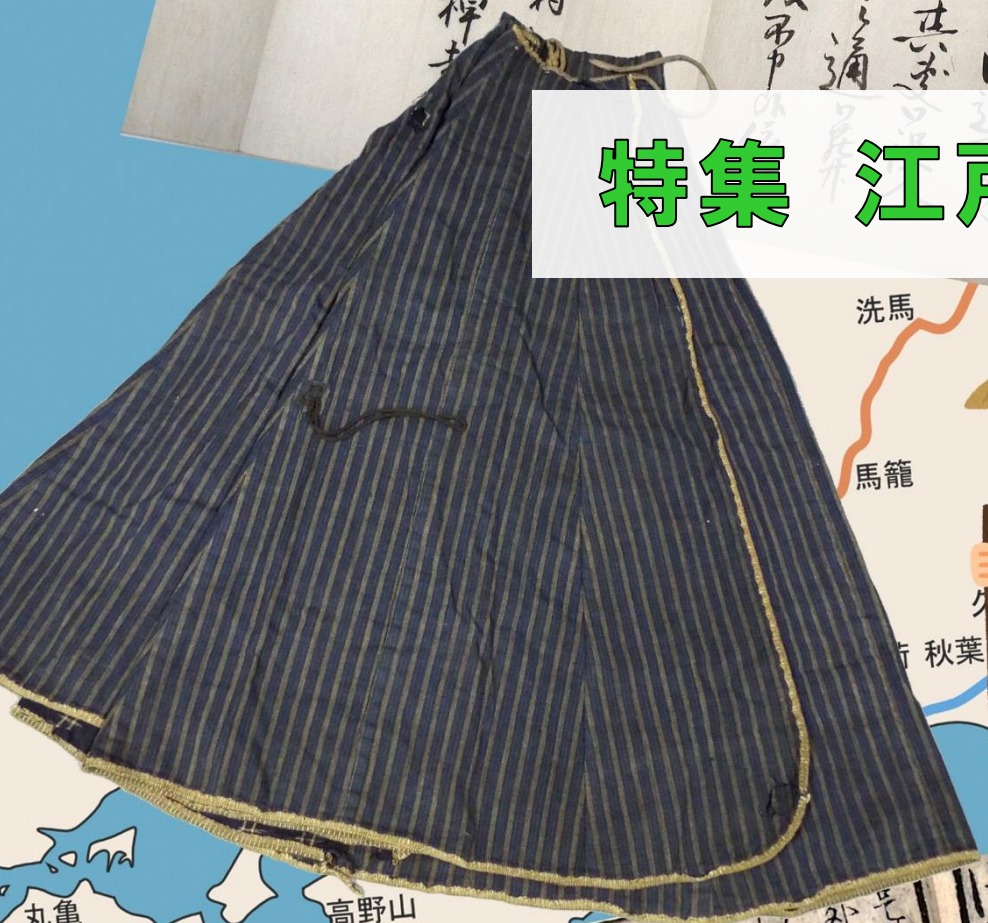
羽村市史編さんだより

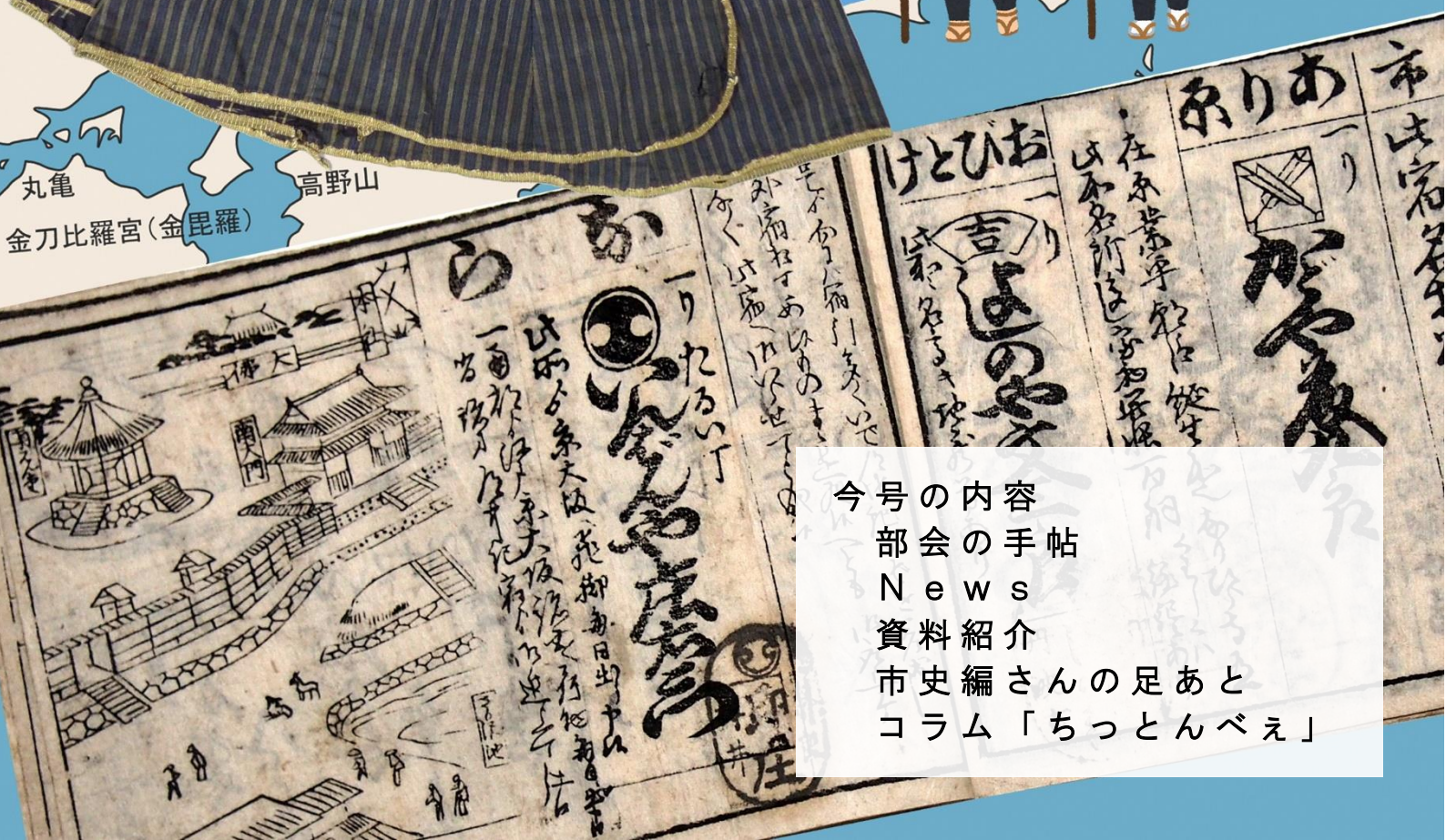
令和3年4月

第25号

伸びゆくはむら

特集　江戸時代の旅





今号の内容

部会の手帖
News
資料紹介
市史編さんの足あと
コラム「ちっとんべぇ」

特集　江戸時代の旅

江戸時代は、幕府による交通環境の整備や治安の維持、経済の安定化が進んだことで、それまで一部の職業・身分に限られていた旅が多くの一般庶民にも可能となりました。今回の特集では当時の羽村の旅の様子を紹介します。

▼地図：羽村市域から伊勢神宮や各地寺社･霊場への参詣

東海道の宿場町を繋げたものが青線、中山道がオレンジ線。地図中の点は羽村市域の人が参詣や宿泊で訪れた代表的な寺社や宿場町を、境界線は現在の県境を示す。

◆旅する目的

江戸時代の人びとにとって労働目的以外での旅といえば、信仰対象となる寺社仏閣への参詣を意味します。また、生まれた土地で一生を過ごす大半の庶民が、他所の土地で見聞を広める貴重な機会でもありました。

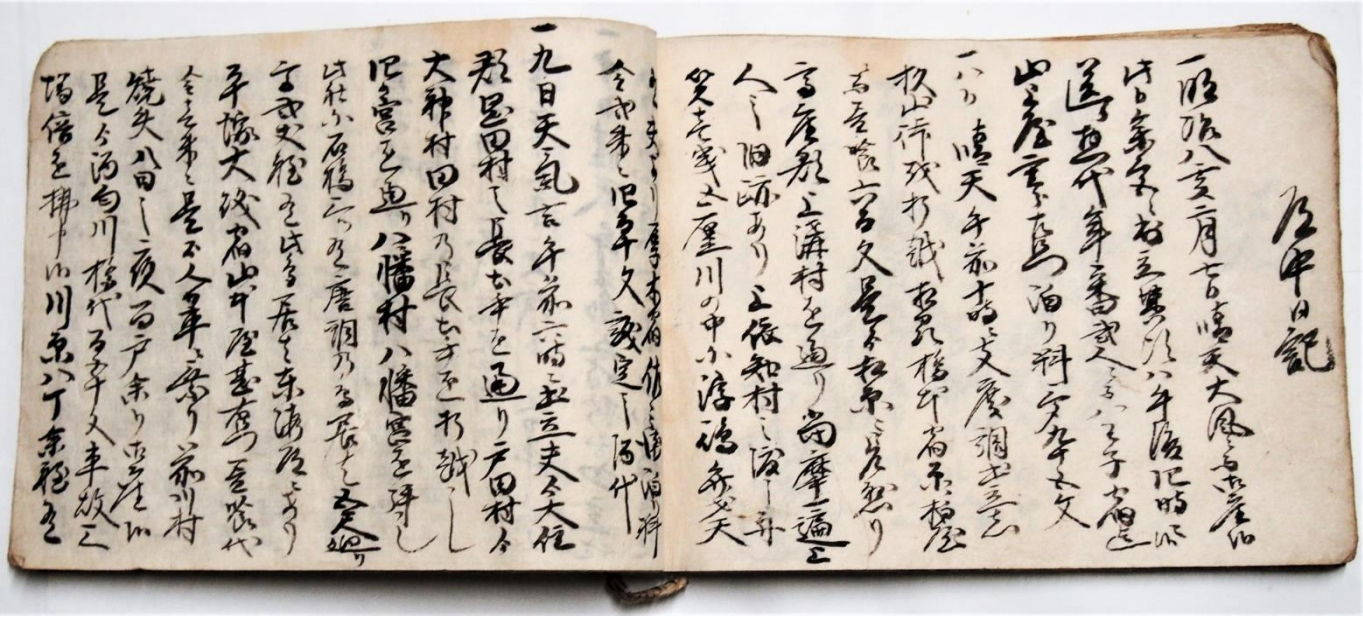
とはいえ、江戸時代の旅は徒歩中心での長期旅行[1)]となり、多額の費用がかかります。そこで人びとは、地域や職業を単位に「講」と呼ばれる組織を結成し、講の中で積立てた資金を旅費にあてて遠方の寺社へ参詣しました。毎年くじ引きなどで数人の代表者を決め、順番に参詣に出ることで、裕福でなくとも、生涯一度は居住地を離れて遠方へ旅することができたといいます。

◆羽村と周辺地域からのお伊勢参り

この講の代表的なものが、伊勢神宮への参詣を目的とした伊勢講です。「お伊勢さん」は広く信仰され、各地で伊勢講が結成されました。

旅に出た人は「道中日記」を書き残しました。どのような行程で旅をし、宿泊や飲食、交通、買い物にいくら出費したかを記録しておき、帰郷後の講中への報告に使うほか、後に旅する人の大きな参考にもなりました。

次ページ上段の史料は、江戸時代と同様の参詣の旅が続いていた、明治８年（1875）２月７日～３月25 日におこなわれた伊勢参宮の道中日記の一部です。伊勢講の一行 14 名は、八王子・厚木を経て東海道を進みながら、途中で久能山（くのうざん）東照宮や秋葉山（あきはさん）、



▲史料：伊勢参宮道中日記及び諸経費領収綴り（前欠）（羽村市郷土博物館所蔵）
羽村市域に残された史料。前半は宿泊・食事の領収証で一部が破れて失われており、
後半には道中日記が綴られている

豊川稲荷といった寺社仏閣を参拝しつつ、伊勢神宮を目指しました。また、江戸時代後期から、伊勢参宮の旅は京都・奈良・大阪の寺社巡り（大和巡り）とも併せておこなわれるようになり、往路は東海道、復路は中山道を通って信州（現長野県）の善光寺を巡るコースが定番化されました。この一行も伊勢神宮の後は近畿地方へ赴き、中山道を通って善光寺を詣で、現在の群馬県・埼玉県を経て羽村へと帰郷しています。同じ年、羽村の別の伊勢講でもほぼ同じルートでの参詣がおこなわれており、こちらは四国の金毘羅（こんぴら）参りも旅程に組み込まれていたようです[2]。更に半世紀前の文政８年（1825）の道中日記[3]には、伊勢参宮から大和巡り、金毘羅参りに加えて四国八十八箇所のお遍路まで行う大がかりな旅の記録が残っています。

◆その他各地への参詣の旅

伊勢神宮以外にも、各地の寺社や霊場への参詣の旅がおこなわれていました。

雹（ひょう）除けや嵐除けの神として信仰され、中山道経由の伊勢参宮復路でも立ち寄られた上州（現群馬県）榛名山（はるなさん）は、榛名講（はるなこう）が結成され毎年代参（代表者が参詣すること）がおこなわれていました[4]。

他にも市内には、出羽三山（でわさんざん）（現山形県）参詣の記念碑が残されています（写真）。天保 12 年（1841）に、越中（現富山県）立山（たてやま）と併せて参詣の旅がおこなわれ、遠く離れた山岳への信仰があったことがうかがわれます。

近いところでは武州御嶽山（みたけさん）の御嶽講（みたけこう）があり、盗難除け・豊作の神として信仰されていました。「おいぬ様」こと大口真神（おおくちまがみ）の御札は、現在も盗難除けのお守りとして羽村市域の家の玄関口で見かけることがあります。

江戸時代の人びとは、どんなに遠い目的地へも基本は徒歩で向かいました。道中日記の記録から計算して、1 日平均 30km 以上の距離を移動したことになります[5]。

これからの季節、かつての街道や参詣の道を、昔の旅に思いを馳せながら歩いてみるのも良いかもしれません。

▲写真：出羽三山碑（一峰院境内）
碑文は表に「月山　湯殿山　羽黒山」、側面に「天保十二辛丑歳」「越中立山」と参詣者4名の名が刻まれている

---

1) 関東・東北地方から伊勢神宮への参詣の旅は２～３か月にも及んだ。そのため、農繁期を避けて冬に出立し、春の田植え前に帰郷する日程で旅をした。（高橋陽一『近世旅行史の研究：信仰・観光の旅と旅先』（清文堂出版、2016））

2) 渡辺安之「道中日記（1）～（6）」（『会報羽村郷土研究』第 11～13 号、15～17 号、1969～1971）

3) 『参宮并ニ所道中覚』（個人蔵）。市内五ノ神地区の家に残されていた、河辺村（現青梅市）の人の記録。旅の参考に譲り受けたものか。

4) 「未年二月　榛名山代参につき講中より書状」（『羽村市史資料編　近世』史料 144、個人蔵）

5) 谷釜尋徳「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際―江戸及び江戸近郊地の庶民による伊勢参宮の旅を中心として―」（『スポーツ史研究』第 20 号、2007）

部会の手帖

今回の「部会の手帖」では、新たな資料編の刊行に向けて編さん作業を続けてきた第１部会と第５部会の活動を紹介します。

第１部会
～原始・古代・中世～

資料編は第１部「考古」と第２部「中世補遺」にて構成されます。一冊の本として、全体的な文言の統一など、最終的な確認作業を行いました。

遺跡調査情報の再確認をしつつ、各章に取り上げられた同じ遺跡の記載情報に整合性がとれているかも確認をしました。また、写真図版の出典について、一覧として示すことができるよう作成しました。

第５部会
～民　俗～

第一部「羽村市のくらしと民俗」の原稿も完成し、第二部「多摩川をめぐる民俗」、第三部「羽村の春祭り」とあわせて原稿の校正を進めました。

人びとのくらしに関わる部分は西多摩地域で一般的なものから、市域や各地区、各家で特有なものとさまざまです。写真や実例を出して記述している部分が多いため、関係者の皆さんへ掲載依頼に伺いました。

News　新たな資料編の刊行について

新たな『羽村市史　資料編』が刊行となります。今回、刊行するのは「考古・中世補遺」と「民俗」です。ともに１冊 2,000 円で、羽村市役所１階案内と羽村市郷土博物館で販売します。販売開始の時期は広報はむらや羽村市公式サイトなどでお知らせする予定です。

表紙の写真　旅の持ち物

※すべて羽村市郷土博物館所蔵

◀**写真上段：往来手形**……江戸時代の人が旅に出るには、届け出をして各地の番所・関所を通行するための身分証明書である往来手形が必要でした。写真は文化２年（1805）、市内川崎地区の宗禅寺が檀家の人に発行したもの。（『羽村市史　資料編　近世』史料 110）

◀**写真中段：道中合羽**……特集でも紹介した明治８年の四国金毘羅参りを含む伊勢参宮と、天保 12 年の出羽三山参詣時に着用されたもの。道中着に道中合羽、三度笠のスタイルは時代劇でもおなじみです。

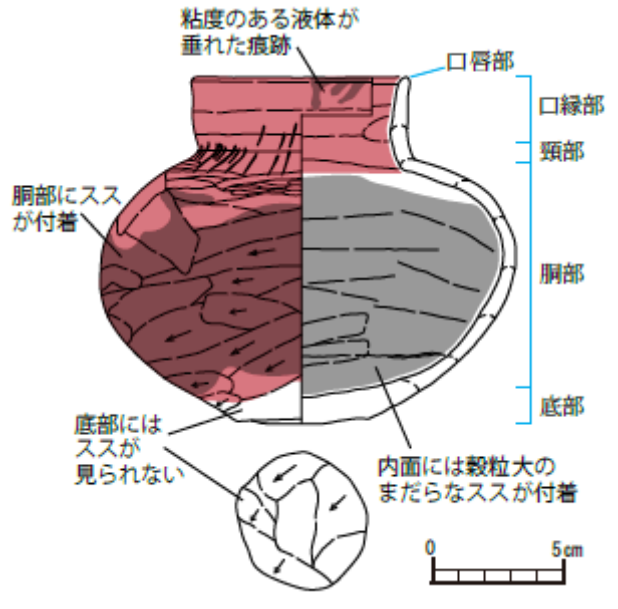
◀**写真下段：大坂三都講定宿帳**……京都・奈良・大阪と、伊勢神宮までの街道沿いにある宿の定宿帳。江戸時代後期、宿屋の組合である定宿講が各地で結成され、旅行者が安心して泊まれる宿のガイドブックとして定宿帳が発行されました。

資料紹介

今回紹介する資料は、『羽村市史 資料編 考古・中世補遺』から取りあげました。

「 写真３－６　羽村市№３遺跡出土遺物 」

「 図３－１　羽村市№３遺跡出土遺物 」より一部抜粋、加筆



毎年春に開催される「はむら花と水のまつり」の後期「チューリップまつり」。色とりどりのチューリップが迎えてくれます。その会場となる根搦崖線下の水田は、現在までに羽村市で古墳時代遺跡が確認された唯一の場所です。昭和49年（1974）に刊行された『羽村町史』では、「根搦前遺跡」として紹介されていて、今年刊行の『羽村市史 資料編 考古』では、「羽村市№３遺跡」としてとりあげています。

昭和 31 年頃、写真にある４点の遺物が水田から出土したことで、ここに遺跡があったことが明らかになりました。手前から土製支脚（２点）、坏形土器、壺形土器です。土製支脚は竈の中で甕を火にかける際に、下から支えるために使われたものと考えられ、６世紀中頃～７世紀初頭のものと推定されています。坏形土器と壺形土器はそれより古く、５世紀末～６世紀初頭のものと考えられています。今回、市史の作成にあたり、４点とも改めて資料の実測をしており、ここでは壺形土器の実測図を紹介します。

土器の各部位は、人間の体の部位に例えて呼ばれます。図版の右側に各部位の名称を書いています。

この壺形土器は、頸部から口縁部が真上に立ち上がり、胴部がコロンと丸みをおびた高さ13.2 cmの小型の土器であることがわかります。実測図は、中心に入れられた線により左と右で表現が分かれています。

左側は土器の外面を表現していて、工具による整形や、どの向きに削って整えられたか矢印でわかるようになっています。右側は、土器の断面と内面の状態を表していて、土器の厚み、内側の底の形もわかります。さらに、底部を除く外面と内面の頸部までが赤く塗られていました（赤彩）。土器の口縁部の色の違いに注目すると、何か液体が垂れた焦げ付きもある様子。何を煮炊きしたのか想像が膨らみます。

灰色で表現されているのは煤です。外面胴部の中ほどから下にかけて煤が付着しているのに、底部外側部分にも底面にも煤がありません。これは、地面を少し掘って窪ませた所にこの土器を置いて火にかけた可能性が高いことを示しています。内側にも特徴的な煤の付着が認められました。改めて実測をして観察することで、どのように使用されたのか新たにわかってきた資料です。

市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。（例）① ⇒ 第１部会

月	日	できごと
12月	24日(木)	③市内資料調査(郷土博物館)
	25日(金)	③市内資料調査(郷土博物館)
1月	５日(火)	③市内資料調査(郷土博物館)
	７日(木)	③市内資料調査(郷土博物館)
	15日(金)	羽村市史編さんだより第24号発行
	28日(木)	⑤編集会議

月	日	できごと
２月	９日(火)	③市内資料調査(郷土博物館)
	12日(金)	⑤第６回市史関連講座収録
	16日(火)	⑤市内撮影
	18日(木)	⑤市内撮影
	23日(火)	⑤市内撮影

「伸びゆくはむら」バックナンバーについて

以下の場所でご覧いただけます。

●市史編さん室(市役所西庁舎3階)

●羽村市図書館(3階地域資料コーナー)

このほか、羽村市公式サイトでもご覧いただけます。

▼公式サイトはコチラから

コラム ちっとんべぇ

第25回「ぽかぽか陽気と春さんぽ」

二十四節気「啓蟄(けいちつ)」３月５日頃が過ぎると、いよいよ春を感じます。冬ごもりの虫たちがはい出るという季節を表す言葉のとおり、野外では草木の花も咲き始め、冬眠から覚める生き物たちのにぎやかな気配を感じます。

市史の調査中、カジカガエルについて聞きました。かつて庭先にいて、その鳴き声がとても美しいとのこと。細い体で、雨どいの隙間に入り込んでいたこともあった、とか。

カジカガエルは 10 cmに満たない小さい体の持ち主で、古くからその美しい鳴き声に人々は魅了されてきました。今でも、カエルファンには人気があります。

最近でも羽村で鳴き声を聞けるとの情報を耳にしました。姿までみられなくても、せめてその鳴き声だけでも、聞いてみたいものです。

生き物を探すとき・観察するときに注意したいのは、その環境を荒らさないことです。足元を踏み荒らさず崩さずに、丁寧な行動を心がけながら、春の陽気を楽しみたいです。

※「ちっとんべぇ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。

令和３(2021)年４月15日発行 第25号 ［発行］羽村市 ［編集］羽村市企画総務部市史編さん室
〒205-8601 東京都羽村市緑ヶ丘5-2-1 電話042-555-1111 内364･365 FAX042-578-0131